

奄美の風だより

発行・編集：奄美自然体験活動推進協議会

NO. 8

(春号： 2)

2002. 5. 1

A N C : News Letter

「コンロンカ」

奄美野生生物保護センター近く

2002. 4月

野も山も美しい若葉におおわれ、山並みが明るさを感じさせてくれる季節になりました。木のそばに近づくとこの時期ならではの若葉の香りが漂ってきます。このところの暖かな陽気にさそわれて、野生の草花も次々と色鮮やかな花を咲かせてきています。新緑のすき間や崖に生えて香ばしい純白なユリの花や、まっすぐに伸びて咲くグラジオラスが見えます。また、車で道路を走っていると沿道近くに咲いているつる性のコンロンカや、南国の雰囲気を感じさせてくれる色鮮やかなブーゲンビリアが咲きほこっているのが目にはいります。いつもながらの光景ではありますが、春の季節を感じさせてくれる時です。

また、集落近くの山からは、野鳥たちが元気に飛び交う姿を見かけることが多くなりました。3月頃からは、新聞等で希少鳥のオオトラツグミやルリカケス、オーストンオオアカゲラなど雛の誕生の様子を伝える記事を目にするようになりました。

寒からず暑からずのこの好季節に海や山へ出かけて自然とふれあうのもいいかもしれません。



「コンロンカ」



「ブーゲンビリア」



「テッポウユリ」



「グラジオラス」

協議会活動報告

◆講演会「奄美の森林ランドスケープと希少鳥獣の現状について」

講演会：平成14年2月10日(日)午後5:00～6:30

講 師：杉村 乾（森林総合研究所・環境計画研究室長）

今年2月、森林総合研究所・環境計画研究室長の杉村さんが奄美に来島されました。杉村さんは1980年代半ばにはじめて来島されて以来今日まで、アマミノクロウサギなどの希少鳥獣と、自然環境の変化について調査が続けられています。

今回は同研究所の職員の方や奄美哺乳類研究会のメンバーの方々と、島内の河川を中心にアマミのクロウサギの糞の調査を行いました。調査での来島を期に、奄美野生生物保護センターで「奄美の森林ランドスケープと希少鳥獣の現状について」と題して講演していただきました。

杉村さんは長年にわたって収集されたデータに基づいて、はじめて来島した時に比べると、クロウサギの生息数や分布域が減少していること、鳥類では特にカラスバトの減少が激しい事について、スライドを使って話されました。杉村さんは「森林は一度伐採すると、野生生物が元のように暮らせるまでには長い年月がかかってしまう」と話され、平成12年から環境省による駆除事業が実施されているマングースについても、野生生物が減っている原因の一つとして挙げられました。講演終了後にいくつか質問された参加者の方に、杉村さんからていねいな説明がありました。

「講演会のようす」



◆講演会「宇宙を飛ぶ奄美のカエル」

日 時：平成14年3月2日 午後2:00～3:30

場 所：奄美野生生物保護センター内(企画展示室)

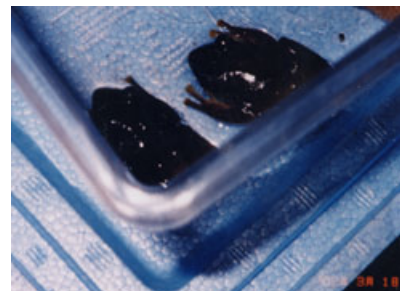
講 師：山下 雅道(宇宙科学研究所・宇宙システム研究系 教授)

山下雅道先生（宇宙科学研究所・宇宙システム研究系教授・理学博士）の講演会が「宇宙を飛ぶ奄美のカエル」と題して奄美野生生物保護センターで開催されました。山下さんは、長年研究されているテーマの中から、宇宙や重力とカエルの関係について分かりやすくお話してくださいました。宇宙ステーション「ミール」で実験した時（1990年2月）のニホンアマガエルの様子をビデオ画像を交えながら宇宙でのカエルのふるまいについて（指の上にカエルを置いたとき地上ではすぐ逃げるのですが、宇宙では頭をそらせて後ろ向きに歩くなど）、実験の結果をいくつか紹介してくださいました。また飛行機での20秒間の無重力実験の結果で、カエルも乗り物酔いをすることがわかったそうですが、種類によっては酔わないカエルもいるそうです。奄美にはたくさんのカエルがいますが、アマミアオガエルなどはオタマジャクシのお腹が透けて見えるので、心臓や腸など内臓の動きを観察することができ、そのため無重力での反応を観察するのに最適とのことで、宇宙実験材料の候補にあげられているそうです。会場に来ていた子たちからはいくつか質問があり「いつ頃宇宙に行くのですか？」の質問に、「早ければ2004年～2006年くらいで、そんなに遠い話ではないと思う」と答えられました。会場の展示室にアマミアオガエルとお腹の透けたオタマジャクシの実物が持って来てありましたので、講演後は子供も大人もすぐには帰らず、興味津々といった感じでカエルの所に集まっていました。

【講演会のようす】



【アマミアオガエル】



★★企画展「もっと知りたい、鳥のこと」開催中★★

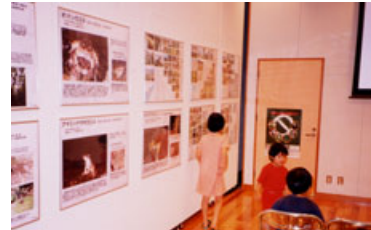
開催期間:4月29日(月)～5月31日(金)

開催場所:奄美野生生物保護センター(企画展示室)

奄美野生生物保護センター開館2周年記念行事として、また「全国野鳥保護のつどい」の奄美での開催を間近にひかえていることもあって、鳥に関する企画展を開催しています。今年度4月からセンターに事務補佐員として勤務している中村友洋さんが収集した野鳥の羽を中心に、上野動物園から送られてきた羽と合わせて約60種類の鳥の羽が展示してあります。中村さんが最初に採集した「ツグミ」の羽(鹿児島県出水市で採集)をはじめ希少鳥のルリカケスの羽などがあります。展示にあたって中村さんは、「鳥を違った視点で見たり、羽を通して鳥がどのように飛んでいるか、感じて欲しい」と話しています。

これと同時に常田守さんが撮影された生態写真を中心に、奄美の希少鳥のオオトラツグミやアマミヤマシギ、ルリカケスなどの写真もパネルにした展示されています。なかなか会える事のない奄美の希少鳥について関心をもてる良い機会かもしれません。期間中にセンターでご覧になってはいかがでしょうか。

「鳥の羽展・野鳥の写真展」



新聞記事 【大島新聞】

【南海日日新聞】

地 域 紹 介 コ ー プ 一 喜 界 町

喜界町は、奄美大島の太平洋側に寄り添うように浮かぶ1島1町の小さな町です。

約12万5千年前に誕生し、日本一隆起スピードが速い珊瑚礁で形成されており、大きな川もないため、土砂の流出が少なく他に負けない美しい珊瑚の海に囲まれています。

他の奄美の島々と同様に、手つかずの自然が数多く残る美しい島ですが、今回は、「チョウの飛び交う隆起珊瑚礁の島」という本町の観光キャッチフレーズがありますので、チョウの紹介をしたいと思います。

まず、自治体単位としては全国的にも珍しい保護条例が制定されているオオゴマダラを紹介します。

このチョウは日本最大のチョウで喜界島が生息地の北限です。そのさなぎは純金でできたように山吹色に輝き、大変美しいです。成虫も低いところをゆっくりふわふわと優雅に

飛ぶため、「南海の貴婦人」の別名があります。他に、「渡り蝶」であるアサギマダラの中継地としても有名です。日本各地から、遠く台湾・沖縄まで約2,000kmも旅する彼らは、何故かそのほとんどが他の奄美の島々を選ばず、喜界島を羽休めの地を選ぶのです。これまでに、静岡、愛知、滋賀、奈良、三重、和歌山等でマーキングされたアサギマダラが喜界島で再捕獲されています。他にも、チョウには珍しく越冬するリュウキュウアサギマダラが集団（コロニー）で越冬する姿も見受けられます。



ポインセチアに誘われたオオゴマダラ
(さて、何頭いるでしょう?)

あやばびら節より

わ しま むかてい とびゆる あやはぶら
まちゅり あやはびら いやりたんも

— なつかしい故郷へむかう蝶々よ、少し
待ってください。私を待つあの人に、
伝えて欲しいことがあるのです。 —

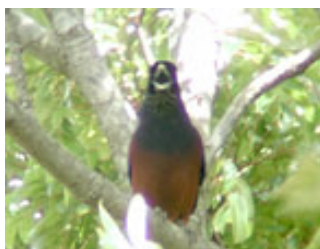
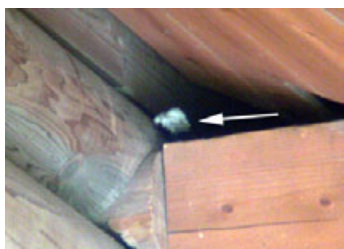
身近な生きもの情報

野生の生きもの観察日記

2002年4月15日（月） フォレストポリスは子育てシーズン」

大和村役場の内山さんから、フォレストポリスの管理棟でルリカケスが営巣しているらしいとの情報を頂き、早速様子を見にフォレストポリスへ行きました。巣は屋根と柱の間にある狭い空間にありました。見た目にはちょっとわかりずらかったのですが、抱卵中と思われるルリカケスの尾羽の白い部分が少し見えていました。子育て中の親鳥は大変警戒心が強いので、離れた所から双眼鏡で観察をしていたのですが、つがいのもう一羽がやってきて、盛んに鳴いて私を威嚇しました。無事にヒナが生まれ、元気巣立つことを祈りつつ、その場を離れました。

その後近くにあるキャンプ場で休んでいると、突然私の横を「キヨキヨッ」と鋭い声を発しながら飛び鳥に驚いてその姿を追うと、オーストンオオアカゲラでした。昨年と同じ所で今年も繁殖しているようです。巣の中からは親が来たのを感じたのか、ヒナの小さな声が聞こえてきました。



2002年4月18日（木） 「悲しいフィールドワーク」

龍郷町の奄美自然観察の森に鳥を見に行った時のことです。自然観察指導員の作田さんから、巣立ち直後のルリカケスのヒナの死体を預かりました。お話を聞くと、以前からノネコが巣の付近にいて、巣立ち直後のヒナを狙って捕まえたとのことでした。預かったヒナはまだ羽も伸びきってなく、「どうしてこんなことに・・・」と本当に悲しい気持ちになりました。

先頃やんばるでもノネコ対策事業が始まりました。現在マングースと並び、ノネコやノイヌの影響は奄美でも無視できない状況になりつつあります。自然観察の森でも、以前にノイヌに殺されたアマミヤマシギが見つかっています。イヌやネコはペットとして私たちにとって一番身近な動物です。でも、放し飼いにしたり、飼えなくなったからといって捨ててしまったりすることは、奄美の貴重な生きものに重大な影響を与えるかもしれません。ヒトと動物との関わりを深く考えさせられながら、森を後にしました。

（報告 センター中村）



（←ネコに捕まったルリカケスの巣立ちヒナ）

（ノイヌに捕食されたアマミヤマシギの残骸→）



春に見られる野生生物

「テッポウユリ」 ユリ科

分布：屋久島・種子島（熊毛島）以南

海岸の岩場や崖に生える多年生草本。鱗茎は黄白色で径5～6cm、苦みが強い。葉は無柄、長さ10～18cm、幅5～15cm、表面に光沢がある。花は茎頂に数個つき、ラッパ形で芳香がある。花披片は倒披針形で斑点はなく、先は少し反る。花粉は黄色さく果は長楕円形で長さ6～9cm。

※ 参考文献：琉球孤野山の花、

：山崎ハルヒ：図鑑奄美の野鳥、



「テッポウユリ」

「コンロンカ」 アカネ科

分布：屋久島・種子島以南

枝の先端はつる状になって伸び、他の木や草に絡みついたり、よじ登ったりして2mほどの高さになる。白い花びらのように見える部分はがくで、星形にひらいた黄色い部分が花である。陽あたりのよい林縁部などに生える。花は3月頃から2ヶ月近くわたりポツポツと咲きつづく。



「コンロンカ」

「カクチョウラン」 ラン科

分布：屋久島・種子島以南

山地の林内に生える多年草本。葉は2～3個束し、長さ70cm、幅15cm。花茎は60～70cm、4～10個の花をつける。がく片と側花弁は長さ4～6cmでほぼ同大、外面は銀白色、内面は黄褐色で対照的である。唇弁は筒状でがく片より短く長さは4～5cm、基部は白く上部は暗紅紫色。



「カクチョウラン」

「キジバト」 ハト目 ハト科

全国の平地や山地に生息し、奄美群島では農耕地や山地の開けた場所、公園や人家近くでは普通にみられる。奄美に生息しているのは亜種リュウキュウキジバトで、本土のものに比べ全身が少し赤褐色味を帯びている。上面にうろこ状の斑があり、くちばしは黒く、足は赤紫色である。よく畑地などの地上を歩きながら、植物質の餌などを食べているが、樹上で木の実を食べることもある。春から秋にかけて数回繁殖する。



「キジバト」

事務補佐員の中村友洋さんを紹介します

今年の4月から、里美咲さんの後任として奄美野生生物保護センターの事務補佐員になった中村友洋といます。3月までは九州大学の大学院で、奄美に棲息するルリカケスとどんぐりの関係についての研究をしていました。今は自然保護官の阿部さんや協議会の永野さんのお世話になりながら一つずつ仕事を覚えています。

最初に奄美に来たのは大学2年の夏、今から5年前です。昼夜を問わず島内を駆けめぐり、夢中になって鳥を見ていました。それから大学院に進学した時、奄美では身近な存在だけどほとんど研究されていないルリカケスを研究テーマにしようと思い、当時完成したばかりの野生生物保護センターにお世話になりながらフィールドワークを行いました。

野生生物保護センターの役割は、オオトラツグミなど希少野生生物の保護増殖、移入動物であるマングースの駆除事業といった研究活動だけでなく、広く一般の人に奄美の自然のことを知ってもらう普及啓発活動の重要な役割となっています。私は自然を守るために、まず自然のことを知ることが大切だと考えています。そして自然を知るためには、少しでも多くの情報が必要です。多くの方々から情報を頂き、センターがそれを広くフィールドバックしていくという、情報のキャッチボールがこれからの自然保護には不可欠ではないでしょうか。地域とセンターが一体となってこの奄美の貴重な自然を長く残していけるよう、皆様のご協力をよろしくお願いします。

★★平成14年度地域紹介コーナ掲載予定について★★

ニュースレターNO	発行年月	原稿提出締切予定日	紹介地域名
第9号(夏号3)	平成14年8月初旬	同年7月26日	与論町
第10号(秋号3)	平成14年11月初旬	同年10月26日	笠利町
第11号(冬号3)	平成15年2月初旬	同年1月26日	天城町

◆与論町企画調整課・笠利町企画財政課・天城町企画の担当者のみなさん
宜しく願います。

—— 編集後記 ——

暖かな陽気に誘われて庭を飛びまわるチョウも種類が増えてきました。手を伸ばせば届くような近くの花に止まっていますが、しばらくすると飛びまわり、また花に止まるといった動作を繰り返しています。奄美地方の5月は梅雨の時期ですが、今月下旬からは名瀬市や大和村では「奄美プラム」の銘柄で知られている甘酸っぱい初夏の果物スモモの収穫が始まります。

